

お江戸日本橋上

柴田錬三郎



え と に ほん ばし
お江戸日本橋 (上)

しば た れん ぎふ ろう
柴田錬三郎

© Eiko Saito 1983

昭和58年11月15日第1刷発行

昭和63年10月28日第9刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価480円

デザイン——菊地信義

製版——株式会社東京印書館

印刷——株式会社東京印書館

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えます。 (庫一)

ISBN4-06-183123-2 (0)

講談社文庫

お江戸日本橋

(上)

柴田錬三郎

講談社

目次

春で、おぼろで	七
貧乏旗本	二七
浮世の風	四〇
片目の狼	六六
敵	五五
隣人遠人	二〇
夜盗往来	三九
昨日の道	一三
怪物	一七
鬼	二〇
昼の月	三九
地獄模様	二四

夜	の	花	二七		
鼠	の	宿	三〇		
恋	慕	く	ず	し	三三
疲	れ	馬	三四		

お江戸日本橋(上)

春で、おぼろで

「女房がなんでえ、女房が……」

酔っぱらった職人が、更けて、人影の絶えた街辻を、右へ、左へ、千鳥足に、ふらついて行く。
「女房が、こわくって、女郎に惚れられるかってんだ。……え、おい、そうじゃねえか。こん畜生っ！」

腹掛けに、両手をつッ込んで、ちよつと、考えるふりに、首をかしげていたが、また、ふらふらと歩き出した。

もうひとつの影が、とある角から、あらわれた。

これは、着流しの浪人者であつた。

職人は、あやうく、ぶつつかりそうになつて、酔眼をあげると、

「お——旦那、そうじゃねえか、なあ」

「また、会ったな、弥八」

おぼろ月の光で、浪人者は、夜目にも白い歯をみせた。

まだ三十前であろう。浪人者にしては、どことなく、すっきりしている。ふところ手の立姿が意気なのである。

「ええ、あっしの名を、おぼえていて、おくんなすったか。ありがてえ」

両国の飲屋で、三晩つづけて、顔を合せていたのである。

どちらも、酒に強かったが、おもてへ出た時は、弥八の方はべろべろで、浪人者は番茶でも飲んだようにけろりとしている差があった。

弥八は、もう一軒寄って、茶碗酒を、半分こぼし飲みをして来たのである。

「旦那、あっしゃ、弥八は、弥八でも、今夜は、やけの弥ン八でさあ」

「そんなに、女房が、こわいか」

「こわいねえ。あん畜生、慍おどって、目をひきつらせたら、そのまんま、お不動さんの壇の上へ据えてお賽銭をさし上げてえくれえの面相になりやがる」

「それでも、女郎買いはやめられぬかな」

「へっへっ、こいつばかりは、ね。」

女房も、ちつとは、知つてのことよ

惚れるに、加減が、できようか、ってんだ——」

「帰って、女房に、薪ぎっぱうで、ふたつ三つ、なぐられて、寝るがいい」

「あやまります、なぐられます、そのあと、抱いて寝てやります、とくらあ。……ところで、旦那、ちいと、うかがいやすが——」

「なんだな？」

「失礼でござんすが、旦那は、ご浪人衆のくせに、ずいぶん、ふところが、あつたかそうでござんすね。……まさか、当節、江戸市中をあらしまわっている大泥棒じゃ、ござんすまいね？」

舌なめずりして、首をつき出した。

「わたしが、大泥棒なら、職人やめて、子分になるか？」

「くわばら！」

弥八は、あわてて、そばをはなれると、

「同じ引けすぎ刻に、忍び込むなら、あっしゃ、盗っ人よりも、間夫まぶだあ」

浪人者は、歩き出した。

その時、背後に、人の気配が、生まれた。しかも、殺気をみなぎらせて――。

浪人者は、知ってか知らずか、ゆっくりと歩いて行く。

大きな店が、大戸をおろしている前であった。

殺気を持った者は、天水桶の蔭から、あらわれたのである。

そこに、ひそんで、浪人者と弥八の問答をきいていたらしい。

同じく武士であったが、こちらは、袴をはき、覆面をしていた。

いきなり、抜き討ちに、浪人者の背中へ、斬りつけた。

瞬間――。

浪人者は、まるで刃風にあおられたように、かるがると、六尺を跳んでいた。

初太刀を仕損じた覆面の武士は、ひくくうめいてから、大上段にとった。

浪人者は、両手をダラリと下げたなりで、じっと、肉薄して来る殺戮者^{きつりく}を、見すえていたが、「刺客にしては、腕前が、不足だな」

と、言った。

「えいっ！」

相手は、こんどは、気合をほとばしらせて、襲って来た。

浪人者は、また、六尺を跳びさがった。

「辻斬りにしては、余裕がない。たぶん、今夜が、はじめてだろう」

「……………」

また、間隔がつまって来た。

攻撃者は、あきらかに、あえいでいた。

浪人者は、笑って、

「そうか。お主、あの職人が、わたしのふところがあたたかい、と言ったので、それで、ねらって居るのだな」

と、言った。

この言葉は的中したとみえて、覆面の武士は、狂おしい勢いで、斬りかかった。兵法もくそもない、滅茶滅茶な襲撃だった。

浪人者は、わざと、あとへあとへ、跳びながら、相手のくたびれるのを、待った。

ついに――。

攻撃者は、息が切れて、もう見得もなく、胸が破れるような荒いあえぎをみせて、白刃を、下げてしまった。

「止めるか。それとも、もうすこしやって、こんどは冷汗をかくか」

浪人者は、皮肉な言葉をあびせた。

すると、覆面の武士は、何を思ったか、その場へ、べたりと、坐った。

「それがしは……、尾羽打ちからして、居るが……直参だ。恥は、知って、居る。……斬れ！」
「恥を知って居るのなら、はじめから、辻斬り強盗を、はたらこう、などという料簡を起こさぬがいい」

「うるさいっ！ 弁解はせぬ。斬れ！」

「あいにく、こちらは、中身が竹光だ」

「嘘をつけ！ それだけの手練者が、竹光など所持するか」

「生来、喧嘩が好きな気性なので、自戒のために、わざと竹光にしている、と申したら、どうだろう」

「おれの刀で斬れ！」

とたんに、浪人者の口から、凄じい一喝が、とんだ。

「たわけ！ 死にたくもないくせに、虚勢をはるのは止せ！」

辻斬りの直参は、がっくりと、首をたれた。

その膝の前の地べたに、ちゃりんと、音がした。

一両小判が、二枚投げられたのである。

はっと顔をあげた時には、浪人者は、うしろ姿を、みせていた。

「ま、待たれい……生命を、奪おうとした者に、めぐむいわれはない！」

対手が言うべきせりふを、叫んで、呼びとめた。

浪人者は、足をとめず、ふりかえりもせず、

「いのちがけだったのは、お主の方だ。めぐむのではない。汗かき代として、支払ったのだ」と、言いのこした。

覆面の武士は、大地に両手をつくと、平伏した。

この光景を、おぼろ月ばかりが、眺め下していたのではなかった。

大店の屋根の上に、ふたつ、黒い影が、うずくまっていたのである。

「やるねえ、あいつ」

これは、きれいな女の声であった。お高祖頭巾で、顔を包んでいるが、細く高く通った鼻梁が、月あかりに、きれいであった。

もう一人は、豆しぼりを盗っ人かぶりにして、草履を、帯の貝の口にはさんでいる。

「あいつ、ただ者じゃねえ」

「なんだと思う、さぶ？」

「あつしらと、同類かも知れねえ」

夜桜お妻、と大層派手な名まえを持っている女賊が、この女であつた。相棒のこの男は、さぶ吉という。

お妻は、良家の生まれであつたらしいが、物心つくかつかぬ頃、かどわかされて、見世物師へ売りとばされたのである。仕込まれたのは、綱渡り、玉乗り、刀の刃渡り、曲独楽など、あらゆる技であつたが、お妻は、それらに異常な才能を示した。

それが、かえつて、仇となつて、いまは、それらの技を、悪事に役立てている。

堕ちるには、それだけの理由があつたが、お妻は、それを口にしたことはない。

さぶ吉が、お妻に出会つたのは、五年の遠島をつとめて、江戸へ帰つて来た三年前である。さぶ吉もまた、兇状持ちの無宿者のかなしさで、やはり、えらぶのは、この道しか、なかった。

実は、さぶ吉は、お妻の美貌と気性に、惚れている。お妻のためなら、死んでもいい、と思つている。

お妻の方は、さぶ吉のその気持ちを、かなりわずらわしいものに、感じているらしいが、相棒としては、この上ない男なので、はなれるわけにいかないのである。

「さぶ、尾けてみるかい？」

お妻が、言った。

「尾けて……どうするんで？」

「正体をつかむのさ」

「造作はねえが……」

言いかけて、さぶ吉は、ちらりと、お妻をぬすみ見た。

なんだか、尾けて、正体をつきとめることが、不吉のはじまりのような気が、ふっと、わいたのである。

「おいそぎよ、さぶ」

つばさ駕籠、とばす南に、うぐいすの、

声も高輪、初音やと、

ねぐらの梅の笑い顔

あれ——なぶらるる、うれしさに

はきちがえたる、上草履

ささ、しょんがえ

しぶいのどを、おぼろ月にきかせながら、浪人者は、五十軒ならびの裏店だなに、帰って来た。

どの家も、灯が消えている。

夜働きの連中も多いのだが、まだ帰って来る時刻ではない。帰って来るのは、夜明けになってからなのだ。

朝から夜まで、騒々しい貧民地域なのだが、ちょうど、この二刻ふたときあまりだけは、ひっそりとしているのである。

この若い浪人者が、ふらりとやって来て、住みついてから、そろそろ半年になる。どうやって、くらしているのか、誰も知らぬ。働いている様子もない。

昼間は、ほとんど、とじこもって、読書したり、うたた寝しているらしい。時折り、近隣の子供をあつめて、面白おかしく、むかしの武将の話など、きかせたりする。

奇妙なことだが、まだ、この浪人者の名前を知っている者は、ないのだ。

「浪人さん」

で、通っている。

騒音と臭気とノミとシラミを我慢すれば、過去を知られずに、気楽にくらせる世界であった。外出しても、戸締りしたことはない。一度も、忍び込まれた形跡はない。

小泥棒も幾人かいるのだが、同じ長屋衆には、仁義を持っているのであろうか。

尤も、盗まれるような品物は、ひとつも置いていない。

書物なんぞは、猫に小判で、見むきもされないのである。

がらっと、戸をひき開けて、

「ふたつ三つ屁を捨てて入るわが家かな、か」

と、言いすてて、上った浪人者は、台所で、水を飲むと、そのまま、万年床へ、寝そべった。

この時、さぶ吉は、おもてに忍び寄って、戸の隙間へ、片目を寄せていた。
行灯あんどんのほの暗いあかりの中に、寝そべった下半身が、見えた。

——なんてこたアねえや。